



若い父親への手紙

—スホムリンスキーの教育実践(5)—

「私たちは、子供たちと一緒に労働します。そして、恐らく、すべての教育はそのことにつぎるでしょう。彼ら自身、労働するということによって教育されるのです。」——人間形成における労働の意味を問いかけた論文《若い父親への手紙》(上)

〔はじめに〕 今回から三回に分けて連載するのは、一九六九年七月九日の「ウクライナ・ブラウダ」紙に掲載された「若い父親への手紙」という論文です。スホムリンスキーはこの論文において、子どもたちを幸福にするためには、幼いときから子どもに労働させることの必要性を説いています。以下に《若い父親への手紙》を掲載します。

*ウクライナ共和国共産党の機関紙

いつものように私の家のポストの中に若い父親からの手紙が入っていました。

た。アンドレイ・アレクサンドロヴィッチというソホーズの労働者が、こんな手紙を書いてきたのです。

「私を困らせている問題にお答え下さい。私には、二人の子ども(六歳と五歳の息子)がおります。私と妻は畜産農場で働いています。子どもたちが幸せであるようにと、一生懸命に働いているのです。でも、子どもたちが本当に幸せなのかどうか——それが今、私を悩ませている問題なのです。毎朝、私は子どもたちを幼稚園に連れて行ってやります。……子どもたちは自分でそこへ行けるでしょうに、何のためにはわざわざ連れていくのか、私にはわからないのですが……。私たちの幼稚園はすばらしいところです。

ある朝、兄のアリェクが、母親の縫ったジャケットが気に入らないといって駄々をこねはじめました。通りに出てから、彼はこっそりジャケットを脱いで、草むらの中に捨ててしまったのです。夕方、よその人がそのジャケット

トを届けてくれました。

一方、今度は弟のウラジミールが、どうしたものか廊下で靴を脱ごうとしないで、泥だらけの靴のまま部屋に入ってきました。その場でヴェーラおばさんが彼を叱ったのですが、彼のおばさんに対する返事ときたら、こうなのです。『あなたが、そうじをしたらいよいよ。そのためにあなたはお金をもらっているのだから……。』冷淡さ、ある種の薄情さ、労働に対するわが子の無関心な態度に、私はショックを受けています。』

確かに、お父さん、あなたの質問は、私たちの生活にあるものの中で最も複雑で、最も困難で、最も切迫した、最も仮借ないことについて、言いかえれば、私たちの未来、成長しつづける世代の教育についてのことと考えることができます。ここで、この質問についてじっくり考えてみましょう。パプルーシユ中学校には、両親学校

「おばあちゃんはいなくなったの……あなたが大きくなったら——わかるでしょうけど……。」強烈な体験からわが子を守ろうとするある親たちの努力は、このようになるのです。

それとともに、率直に言って、次第に気まぐれに変わってしまうような子どもの要求が、世界について認識し、わがものとするための原動力となっているような家庭では、子どもたちは真の幸福を奪われているのです。子どもたちは自己本位の幸福だけで充たされているが故に、不幸です。幸福をもたらすものをすっかり出来合いの形で与えられることによって、子どもたちは正しく世界をみる手段を失ってしまい、ひいては人間としての幸福をも失ってしまふことにもなるのです。人間の幸福は、遺産として引渡すことができませぬし、遺産として受け取ることができません。子どもたちに、姓とともに自らの幸福をも遺産として引渡そうとする家庭には、親の血と労働に吸いつくヒルのようなごろつき、ろくで

があります。教師たちが設けたものです。父親や母親が授業をうけに来ます。そして私たちは、子どもについての深い研究を行っています。私たちの人生を花咲く樹にたとえたとすれば、私たち父親や母親は、花を研究するのです。花は将来何を与えてくれるでしょうか。かわいらしい花からどんな果実がみられるのでしょうか。私たちの全体で二十回の授業の最初にあるのが、幸福についての話です。

そこで私たちは、子どもの要求が多くの家庭において原動力になっていることを指摘します。両親たちは子どもかわいさのあまり、心をもみくちやにするようなことや、不幸、心を揺さぶる感情や体験から子どもを覆い隠してしまします——ここにも大きな不幸があるのです。

七歳にもなりながら、人間の生涯には時として大きな悲しみが襲うこともあるのだということを知らない子どもが少なからずいることは、私にはショックです。

なし、なまけ者といった人間が育つてくるのです。

父親や母親や先生の、教育者としての真髄は、子どもたちに幸福を与えることができるということの中にあります。子ども時代の幸福——それは、暖かさや糧を施してくれる穏やかなかまどの火です。しかし、この火は、悲惨な火事の火種になるかもしれません。すべては、親愛なる両親の皆さん方がこの火をどのように管理するかということにかかわっているのです。本質において、教育のすべての本質は、この火がうまいたけるようにすることにあるのです。ちっぽけな、そして何の危険もなさそうに思われるような、つまらぬたばこの火が、大酒飲み、暴力、犯罪といったような社会の災いの火種となる——私は責任をもってこのように断言します。

子どもは世界に対して目をひらくや否や、また自己を認識するや否や、何かを欲するものです。欲求は人間の生活の原動力です。欲求から要求が生じるのです。しかし、人間の教育のあら

ックです。

一人の六歳の女の子が、私の近所のコルホーズ員の母親であるおばあさんと親しくしていました。しばしばおばあさんのところを訪れ、りんごやくるみを持っていききました。おばあさんは彼女におとぎ話を聞かせてあげたものでした。(残念ながら、今日多くの家庭では、この素晴らしい、うっとりさせてくれるおばあさんのおとぎ話は姿を消しつつあります。) そうこうしているうちに、おばあさんは「お迎えのとき」が迫ったことを悟りました。女の子の母親は一か月間、彼女を隣村の親戚のところへ送りました。何の為にそのようなことを行なったのでしょうか。愛する人の死のショックから子どもを心を守らすためにそうしたのである。女の子は帰ってくると、真先におばあさんの家に行きました。「おばあちゃんはどこ? ママ、教えて。ダリーヤおばあちゃんはどこにいるの?。」

ゆる本質は、個人の要求が、集団・社会・人民・わが祖国の利害と調和するようにすることにあります。子どもが意識的に生活しはじめるまさにその最初の日から、要求を育てることが必要です。人間的な要求を育てることがこそ、家庭教育・学校教育の本筋なのです。私たちは、両親学校で父親や母親に次のことを理解してもらっています。つまり、子どもたちに幸福を与えるということとは、何よりもまず、子どもたちの要求を道徳的にみて正しいと認められ、道徳的に根拠づけられた正当な要求に、また社会の観点からいえば、節度があり、理解しやすく、実現可能な要求にすることなのです。では、家庭生活において要求を育てることが出来る力は、一体どこにあるのでしょうか。若い芽が、したいことを許さないうちには、どのようにすべきでしょうか。

(以下次号)
(横山悦生・京都大学教育学部大学院生
杉山明男ゼミナール)